若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

寄り道もわるくない

釧路労災病院
徳山（とくやま）　雄太（ゆうた）



名古屋市出身。慶應義塾大学理工学部機械工学科を卒業後、不動産会社勤務を経て再受験し、チェコのパラツキー大学で医学を学びました。写真は、チェコでお世話になったボクシングコーチとスパーリングパートナーとの一枚です。

はじめまして。釧路労災病院で初期研修医をしております、徳山雄太と申します。今回は釧路赤十字病院の鱧永恵先生よりご紹介をいただきました。先生とは妻の初期研修同期というご縁で知り合い、今では休日に一緒に旅行へ出かけたり、釧路湿原でカヌーをしたり、パークゴルフをしたりする仲です。

また、先生とは少し面白い縁がありまして、先生の幼少期からの親友が、偶然にも私と全く同じ『徳山雄太』という名前だったそうです。そんな偶然があるのかと驚くと同時に、とても親近感が湧きました。

さて、そんなご縁で今回このリレーエッセイを書く機会をいただいたのですが、今回は少し変わった私のこれまでについて振り返ってみたいと思います。

私は名古屋市の高校を卒業後、慶應義塾大学理工学部に進学し、機械工学科で熱流体力学の分野の研究をしていました。この頃に学んだ知識は、後にチェコで自炊生活を始めた際、パスタ作りやステーキを焼く際などに非常に役立ちました。

また、大学では体育会ボクシング部に所属しました。オリンピック出場経験のあるコーチのもと、週６日、厳しい練習に明け暮れました。個人では神奈川県チャンピオンになり、チームでは後楽園ホールで行われる関東大学２部リーグに出場。４年生の時には３試合に出場し、すべてTKO勝ちしました。

ただ、厳しかったのは練習だけではありません。体育会らしく上下関係もなかなかのもので、夏合宿では、先輩がご飯を食べ終えたことに１年生の私たちが気づかず、先輩自身にご飯のおかわりへ行かせてしまったことがありました。それが指導係の先輩に見つかり、罰として坊主にさせられたこともあります。今となっては笑い話ですが、その後の人生で経験した多少の理不尽にも耐えられたのは、この時代に鍛えられたおかげかもしれません。

卒業後は不動産会社に就職しました。学生時代からインターンとして採用に関わり、多い日には１日10人ほどの学生と１時間ずつ面接をしていました。そのまま入社し、不動産営業として働き始めたのですが、ある日ふと「医者になろう」と思い、入社２週間で退職を申し出ました。

私が採用した学生からすれば、面接であれほど熱心に会社の魅力を語っていた人間が、入社直後に辞めているのですから、さぞ驚いたと思います。

退職後は、まずチェコにある医学部進学準備コースに入りました。そこで生物、化学、物理などを英語で学び、翌年、オロモウツという都市にあるパラツキー大学医学部に入学しました。

入学後は、ドイツ、イギリス、スウェーデン、イスラエルなど、さまざまな国から来た学生と一緒に医学を学びました。日本の大学と大きく違ったのは、多くの試験が筆記ではなく口頭試験だったことです。試験問題はくじ引きで決まり、例えば100個のテーマがあれば、その中から引いたテーマについて教授の前で答え続けます。

この形式は私にとって非常にストレスでした。99個を完璧に覚えていても、唯一曖昧な１個を引けば落ちるかもしれないからです。日本では一夜漬けで試験を乗り越えることもありましたが、この方式ではなかなか通用しません。ここで初めて、自分の不真面目さと真正面から向き合うことになりました。

また、口頭試験を通して、知識そのものだけでなく、相手の質問を読み取り、分からないことがあっても落ち着いて話し、時には「分かっている顔」をして説明を続ける力を身につけました。この技術は今、あまり経験の少ない手技を患者さんの前で行う際にも役立っています。

その後、無事に大学を卒業し、日本の医師国家試験にも合格し、現在に至ります。チェコを卒業してから釧路にたどり着くまでにもいろいろとありましたが、今回は字数の関係で省略させていただきます。

研修医として働き始めてからは、上級医の先生方との知識や経験の差に圧倒される毎日です。それでも、少しでも早く追いつけるよう、日々勉強し、一つずつできることを増やしています。

また、仕事が終わった後や休日には、釧路市内のボクシングジムでトレーナーとして地域の方々と交流しながら、自分自身もトレーニングを続けています。

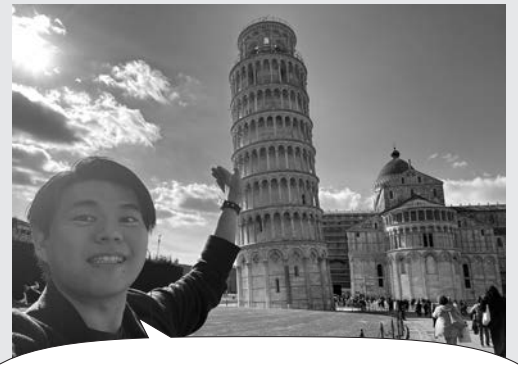
このように振り返ってみると、随分と寄り道の多い人生を歩んできました。ただ、その時々では関係がないように思えた経験も、今になってみると意外なところで役に立っています。これから先もどんな寄り道が待っているか分かりませんが、一つ一つの経験を楽しみながら、医師としても人としても成長していければと思います。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

若手医師リレーエッセイ
Spirits
スピリッツ

医師という仕事の幅広さ

釧路労災病院
津山（つやま）　昂来（こうき）



札幌市出身。北海道札幌南高等学校・北海道大学を卒業しました。釧路労災病院の初期研修医１年目です。旅行が大好きです。国家試験終了後の春休みに初めての海外旅行に行って来ました。写真はイタリア・ピサの斜塔です。

はじめまして。釧路労災病院初期研修医１年目の津山昂来と申します。2026年３月に北海道大学を卒業し、この春から釧路で研修医としての生活を始めました。先生方の温かいご指導のもと、自然豊かな道東の地で学びの多い日々を過ごしております。

このたびは、同期の徳山雄太先生よりご紹介を受け、エッセイ執筆の機会をいただきました。徳山先生は海外の医学部を卒業されており、行動力にあふれ、落ち着いた大人の雰囲気をお持ちの先生です。異なる環境で培われてきた経験やその姿勢から学ぶことも多く、日頃から尊敬しております。このような機会をいただき、心より感謝申し上げます。

今回は、私が医師を志したきっかけと、現在に至るまでの進路について書かせていただきます。

私が医師という職業に興味を持ち始めたのは幼い頃のことです。しかし、身近に医師がいたわけではなく、当時の私にとって医師とは、病気を診断し治療する人という漠然としたイメージに過ぎませんでした。

そんな私に転機が訪れたのは、高校２年生の頃です。母の知り合いに医師の方がおり、お話を伺うため、札幌から東京まで会いに行く機会をいただきました。その際に伺った「医師ほど幅の広い仕事はない」という言葉が、今でも強く印象に残っています。

先生は、医師にはさまざまな活躍の場があることを教えてくださいました。最先端の研究に取り組む人もいれば、手先の器用さを生かして外科医として活躍する人もいる。人と話すことが得意な人は、患者さんと直接向き合う臨床の現場で力を発揮できる。医師という一つの職業の中に、それぞれの得意分野や個性を生かせる多様な道があるのだと説明してくださいました。

当時の私は、その話に大きな驚きを覚えました。それまで医師という仕事は、診療科による違いこそあれ、基本的には同じような能力が求められるものだと思っていたからです。何より印象的だったのは、自分の得意なことがまだ分からなくても、医師を目指してよいのだと思えたことでした。将来どのような仕事をしたいのか分からなかった高校生の私にとって、医師という職業の中に自分に合った場所がきっとあると思えたことは、大きな安心につながりました。

その後、北海道大学医学部医学科に入学し、医学を学ぶ中で、医師の仕事が想像以上に幅広いことを知りました。患者さんとじっくり向き合う医師、手術や処置を通じて治療に携わる医師、研究を通じて新たな医療を切り拓く医師など、さまざまな姿に触れました。一方で、学生時代には自分が将来どの診療科に進みたいのか、明確な答えを持っていたわけではありませんでした。

そして、この春から初期研修が始まり、実際に医療現場で働くようになりました。患者さんの病状を把握し、診断や治療方針を考え、医療を提供する。その一つ一つに難しさを感じる一方で、診療科ごとの専門性や、医師それぞれの役割をより身近に感じています。学生時代の実習とは異なり、自分自身が医療の一端を担う立場になったことで、同じ医師という職業の中にも多様な働き方や価値観があることを、少しずつ実感しています。

高校生の頃に東京で出会った先生の「医師ほど幅の広い仕事はない」という言葉。その意味が、臨床実習や現在の研修生活を通じて、ようやく分かり始めたような気がします。あのときは医師という職業の選択肢の多さに驚きましたが、今は、その多様な世界の中で自分がどのような道を歩んでいきたいのかを考える段階にいます。

医師としてのキャリアは、専門とする診療科を選ぶことだけで決まるものではないと思います。同じ診療科でも、どのように患者さんと向き合いたいのか、どのような技術を磨きたいのかによって、その姿は大きく異なります。これから経験を重ねる中で、自分の関心や価値観も変化していくかもしれません。

だからこそ、今の段階で将来を一つの形に決めつけるのではなく、さまざまな経験を通じて、自分が興味を持ち続けられることを探していきたいと考えています。新しいことを知る楽しさや、目の前の課題に向き合う面白さを大切にしながら、自分なりの医師像を少しずつ形にしていければと思います。

札幌から東京まで足を運んだ高校２年生の自分は、数年後に釧路で研修医として働きながら、あの日の言葉を思い返すことになるとは想像もしていなかったでしょう。まだまだ医師としての歩みは始まったばかりですが、これから出会う人や経験を大切にしながら、自分の進む道を探し続けていきたいと思います。